

あけのほし 2014 年 10 月

「終わりと始まり」

菊田行佳

「わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。…ゼブルン族の中から一万二千人、ヨセフ族の中から一万二千人、ベニヤミン族の中から一万二千人が刻印を押された。この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

(ヨハネ黙示録 7 章 4、8 - 10 節)

「ノストラダムスの大予言」が日本において大ブームを巻き起こしていたときに、わたしは小学生の時期を過ごしていました。テレビの特集番組で恐怖の大王が何なのか、かなり真剣に扱われていたように記憶しています。当時はまだ米ソ冷戦時代の真っ最中で、核戦争によって世界が滅ぶのだという説が、切迫した危機感と共に受け止められていた時世でありました。西側陣営の先兵として、ソ連や中国に対して防御壁のように扱われていたことへの不満やいらだちが、まだ意識されていたのだと思います。1999 年に世界は滅びるのだという予言は、多くの日本人に大きな不安と共に、世界が終わるかもしれないという危機への意識を呼び起こしました。わたしがテレビの映像で鮮明に覚えているのは、人類によって壊された自然が、その人類に襲いかかってくるという内容のものです。時代はずれましたが、最近の地球的な規模で起こっている自然災害や強力なウイルスの拡大などの危機を見ますと、まさに予言された世界の大崩壊が、今まさに起こりかけているのではないかと、錯覚するほどです。

ただ、日本人にはなじみはあまりありませんが、このような世界の終わりについての言説は、キリスト教系の宗教では、大変なじみ深いものです。「ノストラダムスの大予言」シリーズは、累計 600 万部もの販売冊数を誇りますが、キリスト教の世界観を知っている者にとっては、単なる焼き増しで、いつの時代にも登場して来ては消えて行き、特に世紀の変わり目には必ずといっていい程見られる類似現象なのです。1993 年にアメリカのテキサス州で起こったウェーコ事件は、新約聖書のヨハネの黙示録から解釈して、今が世界の終わりの時であると信じてしまった人々が起こした事件です。80 人もの人々が熱狂的な終末思想を信じてしまい、ビルに立てこもって警官と銃撃戦を繰り広げ、最後には集団自殺をしてしまいました。その人々は、汚れた世界から離脱し、清い残りのものである 14 万 4 千人に入るために、必死でした。永遠の命を手に入れるためには、他者を犠牲にすることや、自分の命まで犠牲にしなくてはならないのだと、永遠に滅びることへの恐怖によ

って虜になってしまっていたのです。

しかし、新約聖書に収録されているヨハネによる黙示録は、元来このような理解をするように書かれたものではないのだと、聖書学者のスコットM・ルイスという人は注意を呼びかけます。ルイスは、このような世界の終わりへの恐怖をかき立て、自分だけは生き残りたいと世界との関わりを遮断させてしまうようなあり方を、「ネオ黙示思想」として、本来のキリスト教における黙示文学と分けて考えなくてはならないと言います。この考え方のまず第一の誤りは、すべての歴史は、自分の今の時代に向かっているという考え方です。これは自己中心的なもので、人類の歴史をすべて自分の為にあるものとしてしまう自分勝手な視点から見てしまっているわけです。正しい理解の仕方は、ヨハネの黙示録は、当時の人々の関心に答えるために書かれたもので、未来の予言をするためではないというものです。つまり、同時代の人々のために、著者は、今現在に起こることを、希望のかたちで記したのだということです。

そしてもう一つの誤りとして、黙示録（神が明らかにした世界の秘密）というものは、世界の終わりについては語っていないのだということです。一見終わりのように語られているものは、実は新しい世界の始まりについて、根本的に世界が革新されて、新しい世界がこの世界に始まることを述べているのだということです。つまり、世界が崩壊するという記述は、古い今までの誤った世界秩序が行き詰まり、世界の様々な問題に対処できなくなっていたのを、神がそこに介入して、まったく新たなかたちで刷新するというのが、黙示文学における世界の終わりと始まりの叙述であるのです。そしてそこでは、誰々だけがその革新に与り、誰々はそこから除外されるという排他主義というものは存在しません。その変革は、宇宙規模で起こるもので、神が神であるという理由だけで、清いとか汚れているとか、善人であるとか悪人であるとかの条件はなく、すべてを刷新してしまうのが本来の終末（そして始まり）なのです。

その終わりと始まりの時は、実は、今現在なのです。わたしたちの時代でいえば、わたしたちが今、終わりの時に生きていて、そして始まりの時に同時に生きています。そこには古い混沌とした世界があるのと同時に、わたしたちのとり選択次第で、新しい刷新した世界に生きることが出来る可能性が、同居しています。そういった意味で、キリスト者というのは、ここでの14万4千人に自ら入って、神による世界の刷新に、参加したいという選択をすることが問われているのです。つまり、ここでの選ばれし者たちというのは、混乱した世界の秩序に、愛と憐れみの秩序によって世界を造りかえるために、その働き手としての使命に就きたいという願いが込められた選びなのであります。神を世界の王と認めないというのは、当時において暴力と搾取、尊大さと高ぶりで支配していた権力者による不正義と愛のない秩序を批判するところから来ているのです。すべての人々が神の赦しの元で、公平に、その存在を大切にいたわりあう世界秩序をもたらすことが出来るのが、キリストの神だという信仰がその土台にあります。古い苦しみや悲しみの世界を終わらせて、新しい人類として再生されるのが、ここでの終末（始まり）であるのです。